

令和7年度 第1回倉敷教育センター運営委員会 会議録

1 日 時 令和7年7月24日(木) 14:00～16:00

2 場 所 倉敷教育センター研修室

3 出席者

・委 員(12名)

委員長 三宅 勝

副委員長 有森 真理

委 員 伊住 継行

小久保圭一郎

徳山 智夫

細川 欣洋

横山 武典

門田 昌子(欠席)

田辺 章好(欠席)

藤田 哲彦

守屋 恭子(欠席)

兼田 幸生

堂前 直樹

藤原 郁子

山田 由美

・事務局(8名)

市教委指導課 課 長 岩成 浩

教育センター 館 長 村中 千春

指導主幹 才野 博紀

指導主任 岡田 三枝

鳥越 威志

段堂 博紀

辻原 綾子

岡本 晃典

4 説明及び協議

(1) 研修講座について

○事務局より説明

○協 議

委 員 本校の職員に、初任者研修や中堅教諭資質向上研修に参加した者がいて、感想を聞いてみた。初任者は「同期がいて楽しみだった。」「毎回勉強になることが多くて良かった。」と言っていた。また、特別支援学校での研修について「少人数で学級に入れたことが良かった。」とも言っていた。中堅教諭は、「倉敷教育センターの先生方が温かく迎えてくださる雰囲気が良かった。」と話していた。遠隔研修もスキルアップにはなるが、「人との出会いがある研修がありがたい。」と話していた教員も多いので、対面での研修とのバランスも大切だと感じた。特定課題研究で頑張ったことを生かし、今年度は校内で縦割り遊びや縦割り給食を企画し、学びを学校に還元している様子が見られとてもうれしかった。

委 員 倉敷教育センターの研修が他の出張と重なることもある。担任が抜けると、学校として担任の代わりに学級に入ったり、授業の補填をしたりしなければならない。だからこそ、研修を受ける際にはしっかりと学んで、他の教職員や生徒たちに還元していく意識をもっ

てほしい。

委員 初任者研修の場に倉敷支援学校を利用いただいていることに感謝している。倉敷教育センターの担当者の方との打合せでは、バスから降りてきた子どもたちを迎える際の初任者の立ち位置など、細やかに準備を進めてきた。昨年度からは小学部・中学部・高等部を見て回るということを取り入れた。午後には本校教員とのグループ協議も実施しており、初任者にとって非常に内容の濃い1日になっている。校内を見て回る活動を加えたことで、子どもたちと触れ合う時間が減ることにはなったが、初任者にとっていろいろな経験ができる1日であり、実りのある研修になればと願っている。改善案があれば、新たな手立てを考えていきたい。

委員 学生を教育現場に送り出しつつ、初任者研修の講師も務めている側として、養成段階と採用後の研修がつながっていることは大変ありがたいことである。現場の経験に勝るものはなく、採用後数か月経つと教師としての力量が高まっているのを感じるのは、初任者研修が学びを深める場となっているからだと思う。

委員 これまでは、教員免許更新講習の中で幼児教育に関する最新事情について扱われていた。令和4年に成立した「子ども基本法」により、子どもの意見を尊重した保育というものが重視されるようになった。倉敷教育センターの研修の中でも「幼児教育の最新事情」に関する内容を扱うことがよいと思うが、どうか。

事務局 倉敷教育センターでの講座は限られた日数で実施しており、その年々に必要と考えられる研修を扱っているので、幼児教育の最新事情についてのみ扱う研修は現在行っていない。ただ、講師の先生の中には、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿や、遊びを通した学びについて等、幼児教育の流れの根幹に触れるような講義をいただいている。今後も保育・幼稚園課と連携しながら講座を企画していきたい。

委員 研修に来られる先生方が、まるで担任の先生に会いに来たかのようにライフパーク倉敷に来館され、研修が行われている。先生方が研鑽を積み重ねていける場所があるのは、倉敷市としてありがたいことである。施設面について、駐車場の利便性や暑さ対策など、施設の管理者としてできることを考えていきたい。

委員 中堅教諭資質向上研修で行われた「応援マネジメント」の研修講座の内容を教えてほしい。倉敷市の研修は特別支援教育関連の講座が多いことが大きな特徴となっていて、障がいの理解や支援のアイデア等についての講座は多いと思うのだが、実際には授業づくりや学習指導案作成に困っている先生も多いと聞く。そのあたりどのようにお考えか。全国教員研修プラットフォーム「Plant」の移行についても、管理職の先生方がかなり不安を抱いているので、学校現場に混乱が起きないように丁寧に進めていただきたい。

事務局 「応援マネジメント」の研修は、相手に「伝える」ではなく「伝

わる」ことを目標にしている、他者をマネジメントするためには、まず自分のことをよく知る必要があるということを学んだ。演習を通して、相手への伝え方について考えを深め、実際に行動に移すところまで落とし込むような構成になっていた。

委員 講師には教育の専門家が多い中、この講師の方は民間の研修に多く行かれている方で、民間がどのような人材を求めているのかについて話の中から見えてくるはずである。学校教育とは違った視点に触れることは、受講者にとって刺激になると思う。

事務局 特別支援教育に関する研修では、単元を見通す等、長期的な視野をもった指導・支援について十分にサポートできていない現状がある。現在、中堅教諭資質向上研修の教科指導では、講師の先生からの指導のもと、学習指導案作りや複数学年の授業計画の立案等を行うような取組を実施しているが、受講対象が限られている。今回の御指摘を受けた点について、研修の在り方を見直していくための参考にさせていただきたい。

(2) 適応指導について

○事務局より説明

○協議

委員 倉敷市立高等学校は全校定時制で、中学校時代に不登校だった生徒が多く入学してくる状況にあるが、高等学校に入学してからは不登校状態から改善傾向にある生徒が多い。それは高等学校の穏やかなペースの中での学び直しや、少人数での運営による安心感からくるものであると思う。また、教育相談員やスクールカウンセラー等の教育相談を積極的に進めており、これもまた生徒たちにとっての安心できる場づくりに寄与していると考えている。

委員 本校にも不登校児童が在籍しているが、ふれあい教室に行かせたいと思っても家庭の同意が得られないこともある。また、自立応援室の利用では教員等が授業を受けもっていない時間に対応する必要があるが、支援員や教員が足りていないことが課題として挙がる。自立応援室で使えるような教材やコンテンツがあればありがたい。

事務局 自立応援室については、教室の掲示、支援員の配置、保護者との連絡の工夫などが効果を上げているという調査結果が出ている。また、支援員や教員との会話を楽しみにしていたり、少人数でゆっくりとしたペースで過ごすことができたりすることが、来室しやすい雰囲気をつくる要因となっている。一方で、支援員がいない時間があることが今後の課題だと思っている。

委員 本校では、昨年度は自立応援室の利用が急増した。支援員や教員が交代で支援に入る体制をとったことで、生徒は安心して来室できている。ただ、教員の負担は大きい。倉敷ふれあい教室のオンライン指導は、外出の困難な生徒でも参加できるため非常にありがた

い。選択可能な学びの場が増えているので、引き続き取り組んでいただきたい。

委員 自立応援室の設置状況はどのようになっているのか。

事務局 学校によっては、必要に応じて保健室や会議室を利用するといった対応をとっているが、基本的に全ての小中学校で自立応援室を開設している。

委員 ふれあい教室の利用者が増えているとのことで、学びの多様化を公の力で進めていこうとしていることが伝わる。ただ、人的支援体制に限界がこないか不安を感じている。

事務局 ふれあい教室の入室人数増加については、我々も今後の動向を見守りながら対応を考えていかなければならない。それと同時に、安心できる場で過ごす中でエネルギーを溜めた子どもたちを、次のステップへどうつなげるか、どのように後押しをしていくのかについても課題として挙がっているところである。

(3) 教育相談について

○事務局より説明

○協議

委員 青少年育成センターの令和6年度の相談受理件数は、電話相談333件、来所相談25件、メール相談155件で、合計513件。その内、青少年の相談件数は120件だった。中には命に関わる相談もあり、秘密を守りながら、必要に応じて関係機関と連携して対応している。対人関係、不登校などの内容が多くを占めている。その中で、不登校傾向の児童生徒をどのようにして学びの場へつなぐか、考えているところだ。倉敷ふれあい教室との連携についても、今後検討していきたい。

委員 中堅教諭資質向上研修で「いのちのサインに気付くために」という講座をもたせていただいている。若者の自殺が社会問題になっている中で保護者からの相談は増加傾向にあるが、児童生徒への直接的な支援はできにくい状況である。学校や倉敷市教育委員会と連携を図りながら、児童生徒の支援について考えていく必要があると思っている。昨年度は人権教育の一環として、学校でメンタルヘルスに関する研修を行った。児童生徒の相談の場がどこにあるのかを知る機会は限られているので、今後も情報を提供し続けていきたい。もし機会があれば、倉敷教育センターでも相談機関を勧めていただけるとありがたい。

委員 養育状況の気になる御家庭の見守りについて、小中学校の丁寧な関わりが非常にありがたい。保護者の方からの相談もあるのだが、家庭によっては、子どもが学校に行かない状況が常態化して保護者からの登校の促しが無い事例や、生活リズムが整っていない事例もある。生活面を整えつつ、子どもにとってより良い対応について保護者に伝えていけたらと考えている。